

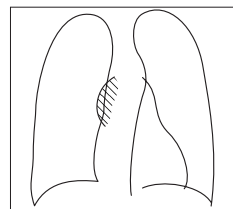
I. 外科医が望む胸部画像診断

4. 縦隔腫瘍(嚢胞成分を有する胸腺腫)

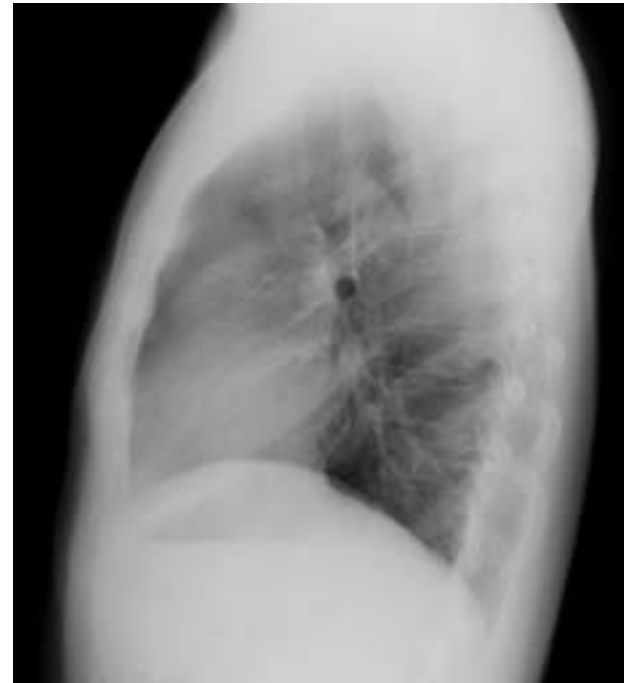
画像のポイント



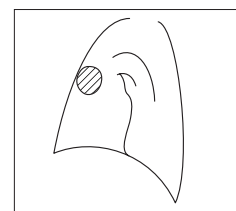
右第1弓に重なり、右胸腔側へ張り出す腫瘍。



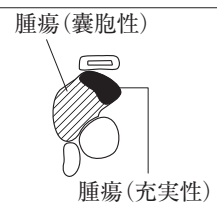
症例1 胸部単純写真



上行大動脈の前方、心陰影の上方に約5cmの類円形腫瘍陰影。

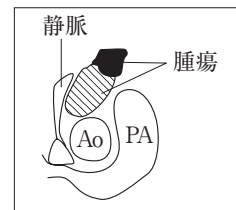


症例1 胸部単純写真(側面)



結節様の充実性部分を伴う嚢胞性腫瘍。

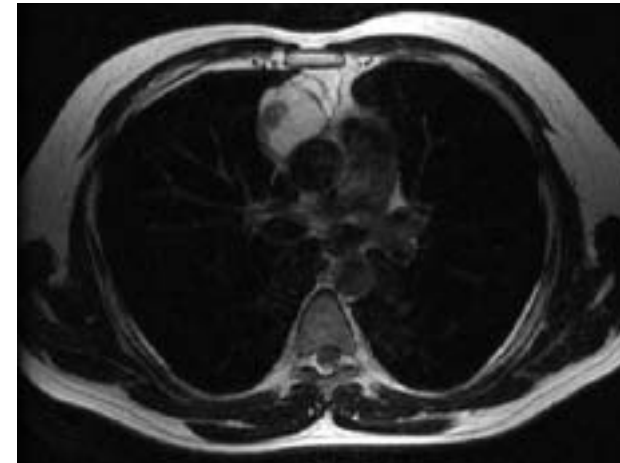
症例1 CT



T1強調で低信号を主体とする腫瘍。

症例1 MRI (T1強調)

症例1 (44歳男性) : 充実性成分と嚢胞成分の混在する胸腺腫



T2強調で高信号を主体とする腫瘍。右側寄りには低信号の部分。

症例1 MRI (T2強調)



造影効果が軽度の類円形腫瘍。腫瘍内部は嚢胞変性と充実性部分。

症例1 MRI (造影T1強調)

所見のポイント

- ① 前縦隔の4cm大の類円形腫瘍で、造影効果は軽度。
- ② T1強調で低信号、T2で高信号が主体となり一部には低信号の部分に伴い、充実性部分と嚢胞変性を伴った縦隔腫瘍(胸腺腫)である。

解説

前縦隔腫瘍のなかでは胸腺腫が最も頻度の高い腫瘍とされるが、そのほかに奇形腫や縦隔嚢胞などの良性腫瘍も知られている。最近では内視鏡下手術の技術が進歩し、良性腫瘍のほとんどが胸腔鏡下手術で摘出されている。しかし、胸腺腫は再発や播種などの悪性経過をたどる可能性があり、腫瘍本体だけでなく左右胸腺の全摘除とともに周囲脂肪組織の摘除を要する疾患である。そのため、胸腔鏡下手術だけでは不完全切除に終わる可能性が高く、手術時のアプローチ方法として多くは胸骨正中切開が行われるため、他の腫瘍との鑑別が重要である。胸腺腫のなかには本例のように嚢胞成分を主体とするものも存在し、良性縦隔嚢胞との鑑別が重要である。

画像のゴール

- ① 腫瘍内部構造の描出。特に充実性か嚢胞性かの鑑別。
- ② 周囲脂肪組織や血管との関連性を描出。
- ③ 胸腔内播種病巣などの有無判定のための画像描出。



嚢胞性腫瘍(良性)と考えられても、なかには嚢胞性変化を伴う悪性腫瘍も存在し、充実性病変の存在有無の判定は治療方法選択だけでなく予後に影響を与える。